

## 作家・作品説明

### 1. 北野恒富 《早春美人》

大阪を代表する日本画家。

二人の着物姿の女性をモチーフに描いた恒富の初期作品。第4回文展に初入選した《すだく虫》（明治43年）と似た特徴が見受けられる。

### 2. 佐伯祐三 《目白の風景》

大阪出身の洋画家。

佐伯が一時帰国時代（1926年～1927年前半）に集中的に描いた下落合風景の一つ。

パリの石造りの建物と比べて脆弱な日本の風景に相對し、佐伯が見出した新たなモチーフとして電柱があるが、ここでも中景の建物の周りに、ひょろりとした電柱と煙突が数本鉛色の空に伸びており、波打つような筆勢の煙の表現などには、特に佐伯らしさが現れている。

本作は祐三の兄・佐伯祐正から社会事業を通じて親交のあった個人に贈られ、それ以後、個人所蔵者のもとで管理されてきた。裏面のラベルから、作家の生前もしくは没後すぐの展覧会に出品されたことが推察されるが、個人に贈られた後の1930年（昭和5）以降は一般に公開されたことはない。

### 3. サラ・モリス 《Sorbonne [Abu Dhabi]》

サラ・モリスは90年代後半から米国ニューヨークで活躍している、抽象表現を用いる新世代の作家である。建築物や文化的シンボルに隠された意味や権威構造の調査結果から色とフォルムを決定し描き出す。本作は塗料を用いた発色のよい色で構成された図形が特徴的な、モリスの代表的なシリーズの作品である。

### 4. 榎倉康二 《無題》

1960年代末から70年代初頭にかけて現われた、戦後の日本美術史の重要な動向「もの派」を代表する作家の一人。

本作は、榎倉が展示壁面と作品、および画面内の位相やズレ、二重性、作品としての同一性をテーマにした時期に制作された代表的な作品である。